

イリイチを読む

中京大学情報理工学部

鈴木常彦

本日の次第

- 14 : 50 ~ 15 : 20
「コンヴィヴィアリティのための道具」概覧
- 15 : 20 ~ 15 : 50
ディスカッション
- 15 : 50 ~ 16 : 10
ライティングトーク（イリイチ一節）

コンヴィヴィアリティのための道具

- Ivan Illich
- 1973
- メキシコ
クエルナバーカ
CIDOC(国際文化
資料センター)

コンヴィヴィアリティのための道具

イヴァン・イリイチ 著

渡辺京二/渡辺梨佐 訳

TOOLS FOR
CONVIVIALITY

はじめに

はじめに

これから何年かのあいだ、私は産業主義時代の終焉というテーマと取り組んで行くつもりだ。パッケージ化と学校化の現代に生じた言語・神話・儀式・法の変化のあとを私はたどりたい。産業主義的生産様式の独占の退潮と、この生産様式が提供する産業主義的起源の諸職業の消滅とを、私は記述したいのだ。

私はとりわけ、人類の三分の二が、その生産様式における脱産業主義的な均衡をいまだちに選択することによって、産業主義時代を経過せずにすまることが、いまなお可能であることをはっきりさせたい。そういう脱産業主義的な均衡は、高度に産業化された諸国民も、混沌状況へおちこむことを望まないならば、採用しないわけにはいかないのである。こういう課題への準備作業として、私はこの論文を大方の批判にゆだねる。

- パッケージ化と学校化
- 産業主義時代の終焉
- 脱産業主義的な均衡

はじめに

- 自然な規模と限界
- 限界を超えたとき
 - 新たな奴隷制
 - 校舎化、病棟化、獄舎化
- 科学技術が管理する人々ではなく、政治的に相互に結びついた個人に仕えるような社会が"コンヴィヴィアル"
- 道具が責任をもって限界づけられた現代社会がコンヴィヴィアル

すぐれて現代的でしかも産業に支配されていない未来社会についての理論を定式化するには、自然な規模と限界を認識することが必要だ。この限界内でのみ機械は奴隷の代りをする事ができるのだし、この限界をこえれば機械は新たな種類の奴隷制をもたらしということを、私たちは結局は認めなければならぬ。教育が人々を人工的環境に適応させることができるのは、この限界内だけのことにすぎない。この限界をこえれば、社会の全般的な校舎化・病棟化・獄舎化が現れる。政治が、エネルギーや情報の社会への平等な投入に関わるというよりむしろ、最大限の産業産出物の分配に関わるのが当然とされるのも、この限界内のことにすぎない。いったんこういう限界が認識されると、人々と道具と新しい共同性との間の三者関係をはっきりさせることが可能になる。現代の科学技術が管理する人々ではなく、政治的に相互に結びついた個人に仕えるような社会、それを私は「コンヴィヴィアル自立共生的」と呼びたい。

あれこれ迷ったすえ、尊敬する友人たちの忠告にさからって、私は、道具が責任をもって限

1. 二つの分水嶺

- 医療と医療を必要とする環境の発展とのマッチング
- 医原病
- 医療の高額化と恩恵の不平等
- 自分たちは患者にすぐれた健康を与えているという医師のうぬぼれ
- エリートによる価値のサービスという形をとった社会まるごとの搾取
- 節約された時間より多くの時間

他の産業主義的諸制度も同じく二つの分水嶺をすでに通過した。このことはこの一五〇年のあいだ科学的基準にしたがって再編成されて来た主要な社会的機関についていえる。教育・郵便・社会事業・輸送、さらには土木工学さえこの進化のあとを追った。最初の分水嶺では、新しい知識がはっきり指定された問題の解決に適用されたし、科学的な測定手段が新しい効率を説明するのに用いられた。しかし第二の分水嶺になると、それまでの達成によって立証された進歩が、価値のサービスという形をとった社会まるごとの搾取に対する理論的根拠として用いられる。その価値は、社会のたんなる一構成分子、つまり自分で自分を有資格化する専門職エリートのひとつによって決定されたえず改訂されるのだ。

輸送の場合には、モーターを備えた乗りものの奉仕を受けていた時代から、社会が事実上、自動車の奴隷となるにいたった時代に移るには、ほとんど一世紀を要した。アメリカの南北戦争のあいだに、車輛に搭載した蒸気機関が効用あるものになった。輸送における新しい能率化によって、多くの人々が鉄道によって王侯の馬車の速度で旅行できるようになった。次第に、望ましい移動といえば乗りものの高速が連想され、ついにはそれと同一視されるようになった。しかし輸送がその第二の分水嶺をこえてしまったとき、乗りものはそれが地域を結びつけるのに役立つというよりさらに距離を生み出してしまった。つまり交通のおかげで、節約された時間より多くの時間が社会によって使われたのである。

1. 二つの分水嶺

- 自然な規模と限界
- 限界を超えたとき
 - 新たな奴隷制
 - 校舎化、病棟化、獄舎化
- 科学技術が管理する人々ではなく、政治的に相互に結びついた個人に仕えるような社会が"コンヴィヴィアル"
- 道具が責任をもって限界づけられた現代社会がコンヴィヴィアル

われわれの今日の社会的危機について新鮮な展望を得るには、こういったふたつの分水嶺が存在するのを認識すれば十分である。十年のうちにいくつかの主要な制度は手をつないで第二の分水嶺をのりこえた。学校は教育を提供する効果的な手段だと主張する資格を失いつつあるし、自動車は大量輸送の効果的手段ではなくなり、流れ作業は容認できる生産様式ではすでになくなっていく。

証拠は同一物をより多く投入することが完全な敗北につながることを明示しているのに、成長熱にうかされた社会では、まさにより多くのものを投入することが価値あることのように見えるのである。爆弾をもっと、警察をもっと、医学検査をもっと、教師をもっとというだけではなく、情報をもっと、研究をもっとという絶望的な懇願の声があげられる。『原子科学者公報』の編集長は、われわれが今日抱えている諸問題の大部分は、最近得られた知識の誤った適用の結果であると主張し、こういう情報の生みだした混乱に対する唯一の解決策はもっと情報をふやすことであると結論している。科学と技術が問題を生みだした場合、それを克服しうるのはより多くの科学的知識とよりよい技術しかない、というのが今日流行の言い草になっている。悪しき管理の是正策は、管理の増強なのだ。専門分化した研究の是正策はより高くつく学

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 機械は働きはしない
- 人間は学校化されない
- 機械は人間を奴隷化する

II 自立共生的な再構築

加速された危機の兆候は広く認識されているし、それを説明しようとする試みも数々なされて来た。私は、この危機はふたつの面での大きな失敗に終わった実験にねざしていると信じるし、危機の解決はその失敗を認めることから始まると主張する。百年のあいだ、私たちは機械を人間のために働かせようと努めてきたし、また機械に奉仕される生活に適するように人間を学校化しようと努めてきた。いまや、機械は働きはしないのだし、人間は機械に奉仕される生活にあうように学校化されはしないのだということは明らかである。実験の基礎となっている仮説はいまや廃棄されねばならない。その仮説とは機械は奴隷のかわりをするができるというものだった。明らかな証拠によれば、こういう目的に用いられたとき機械は人間を奴隷化するのである。独裁するプロレタリアートも、レジャーをたのしむ大衆も、どちらもたえず膨張す

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 今日の深部構造を逆倒することを学ぶ
- 機械は人間を奴隷化し消費者の役割に押し下げる
- 社会は自立的な個人と一次集団の貢献度をより大きくするよう方向で再建されねばならない。

る産業主義的な道具の支配からのがれることはできない。

私たちが道具の今日の深部構造を逆倒することを学ばないかぎり、すなわち高度で非依存的な効率をもって働く権利を保障するような、そうすることで同時に、奴隷にも主人にもならずにすむようにし、各人の自由の範囲を拡大するような、そういう道具を人々に与えないかぎり、危機は解決不可能なのだ。人々は自分のかわりに働いてくれる道具ではなく、自分とともに働いてくれる新しい道具を必要としている。人々は、より巧妙にプログラムされたエネルギー奴隷ではなく、各人がもっているエネルギーと想像力を十分にひきだすような技術が必要としているのだ。

私の信じるところでは、社会は、新しい生産システムの全体的効率に対する、自立的な個人と一次集団の貢献度をより大きくするような方向で、再建されねばならない。その新しい生産システムは、そのシステム自身が定めた人間的な必要をみたすように作られているのだ。実際には、産業主義的社会の諸制度はまさにその反対のことをしている。機械の力が増大するにつれて、人間の役割はますます単なる消費者の役割におしきげられていく。

移動したり棲みついたりするには、個人は道具を必要とする。病気にかかれば治療が必要だ

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 富める国々の囚人
- 自立共生(コンヴィヴィアリティ)を剥奪されている
- 単なる消費者の地位に降格
- 各人のあいだの自律的で創造的な交わりと、各人の環境との同様の交わり
- 人間的な相互依存にうちに実現された個的自由

人々は物を手に入れる必要があるだけではない。彼らはなによりも、暮らしを可能にしてくれる物を作り出す自由、それに自分の好みにしたがって形を与える自由、他人をかまったり世話したりするのにそれを用いる自由を必要とするのだ。富める国々の囚人はしばしば、彼らの家族よりも多くの品物やサービスが利用できるが、品物がどのように作られるかということに発言権をもたないし、その品物をどうするかということも決められない。彼らの刑罰は、私のいわゆる自立共生を剥奪されていることに存する。彼らは単なる消費者の地位に降格されているのだ。

産業主義的な生産性の正反対を明示するのに、私は自立共生コンヴィヴィアリティという用語を選ぶ。私はその言葉に、各人のあいだの自律的で創造的な交わりと、各人の環境との同様の交わりを意味させ、またこの言葉に、他人と人工的環境によって強いられた需要への各人の条件反射づけられた反応とは対照的な意味をもたせようと思う。私は自立共生とは、人間的な相互依存のうちに実現された個的自由であり、またそのようなものとして固有の倫理的価値をなすものであると考える。私の信じるところでは、いかなる社会においても、自立共生が一定の水準以下に落ちこむにつれて、産業主義的な生産性はどんなに増大したとしても、自身が社会成員間に生み出す欲求を有効に満たすことができなくなる。

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 社会主義への移行？
- 道具を政治的に統御
- 技術官僚支配がもたらす災厄
- 地域社会で諸道具をシェア
- 他の成員の同等の自由のためにのみ制限される自由

社会主義への移行は、今日の諸制度を転倒し産業主義的な道具を自立共生的な道具で置き換えることなしには、なしとげることはできない。同時に、社会主義的な公正の理想がゆきわたらないならば、社会の道具的再編成は敬虔な夢にとどまるだろう。われわれの主要な諸制度の今日の危機は、革命的解放をはらむ危機として歓迎されるべきだと私は信じる。なぜなら、われわれの今日の諸制度は、人々により多くの制度的産出物を供給するために、基本的な人間の自由を切りつめているからである。この世界規模の制度の世界規模の危機は、道具の性質についての新しい自覚と、道具の統御のための大衆行動をもたらす可能性がある。もしも道具が政治的に統御されないなら、道具は災厄に対する時期おくれの技術官僚的反応という形で管理されることになる。自由と尊厳は、人間の道具に対するこれまで見たこともないような隷属のなかに、姿を没し去るであろう。

技術官僚支配がもたらす災厄にかわる選択として、私は自立共生的な社会のヴィジョンを提案する。自立共生的な社会が実現できるとすれば、それは、もっとも十分にかつもっとも自由に地域社会の諸道具を利用できる機会を各成員に保証し、しかもこの自由を他の成員の同等の自由のためにのみ制限するような社会的配置の結果であろう。

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 3つの価値
生存、公正、自律的な仕事
- 道具によって平等に奴隷化
(例えば Windowsの強制?
社会は道具に最適化する)
- パワーの公正な分配
- 分配、参与の両面で
公正な生存

自由を制限するだろう。その三つの価値とは、生存・公正・自律的な仕事である。これらの価値は、どんな自立共生的な社会にとっても根本的なものだと思ふ。ある自立共生的な社会が他のそれと、実行のしかたや制度や理論的根拠においてどんなに違っていても、そうだと思う。この三つの価値のそれぞれは、道具に対してそれぞれの立場からする限界設定を行う。生存のための条件は必要なものではあるが、公正を保証するには十分ではない。人は牢獄の中でも生きのびることはできるのである。産業的産出物の公正な分配のための条件は必要ではあるが、自立共生的な生産を増進するには十分ではない。人は自分が使う道具によって平等に奴隷化されうるのである。自立共生的な仕事のための条件は、これまで存在しなかった能力の公正な分配を可能にするような構造的配置である。脱産業主義的社会は、自分を仕事において表現する個の能力が、他の個に強制的に労働させたり教えこんだり消費させたりするのを、条件として必要とすることがないように構築されねばならないし、また構築することができるとだ。

科学技術時代においては、分配・参与の両面で十分に公正な生存のためには、道具の自立共生的な構造が必要である。それは科学が新しいエネルギー源を開発したからである。投入をめぐる競争は破滅につながる。といって投入を巨大化した組織の中央管理に委ねれば、産出の平

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 自立共生的生活様式への移行には生みの苦しみはある
- 移行は急激に始まりうる
- 無制限な繁殖、繁栄、パワーの全般的断念が必要

等な分配という見せかけのために、投入に対する統御の平等性を犠牲にすることになるだろう。理性的に設計された自立共生的な道具は、いまや参与面での公正の基礎となっているのだ。

しかしだからといって、私たちの現在の生産様式から自立共生的な生産様式への移行は、多数の人々の生存を深刻に脅やかすことなしに遂行されるというわけのものではない。今日では、人々と彼らが用いる道具との関係は自己破滅的に歪められている。パキスタンの人々の生存はカナダの穀物に依存しているし、ニューヨークの人々の生存は天然資源の世界規模の収奪に依存している。世界全体が自立共生的な社会として生れかわる生みの苦しみ、餓えたインド人や無力なニューヨーク人にとってひどく苦痛なものになることは避けられないだろう。のちほど私は、圧倒的に産業主義的である今日の生産様式から自立共生的性への移行が急激に始まりうることを論じる。しかし、多くの人々の生存のためには、移行がいつ頃に起らないほうがのぞましいだろう。公正のうちに生きのびることは、自立共生的な生産様式の採用にとまなういろいろな犠牲と、個人と集団の両方の側における無制限な繁殖・繁栄・力能の全般的断念という、代償を支払う場合にのみ可能だと私は主張する。この代償は、なんらかの専制的なレベル・アサンがゆすりとることができるとはではなく、また社会工学者が引き出すことができるも

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 主題は道具であって意図ではない
- ファンタジー、ユートピアの提案ではなく、行動指針、手続きを提案している
- 人々を操るものを見分ける基準を設定
- 自律共生を絶滅させる製品や制度を取り除く (限界の設定)

この書物で、私は目的と化するに至った手段を見分ける方法を提供したい。私の主題は道具であって意図ではない。主題をこのように選んだために、私は関連があり心をそりもするいくつかの課題ととりくむことができない。というのは……。

1 どんなものであれ将来の架空の^{コミュニティ}共同社会をくわしく記述することは私の目的にかなわない。私が提供したいのは行動のための指針であって、空想物語ではない。自立共生的な暮らしかたへと向っている現代社会というものは、もし実現すれば、何人の想像も希望も及ばぬような驚異を花開かせることができる。私はユートピアを提案しているのではない。それぞれの共同社会が独自の社会的配置を選択できる手続きを提案しているのだ。

2 私は自立共生的な制度や道具を設計するための社会工学的マニュアル造りに貢献しようとは望んではいない。また、実現すればあきらかによりよい技術であろうもののセールス・キャンペーンをやるつもりもない。私の目的は、道具のために人々を操っているものをただちに見わけることができる基準を設定することであり、またそのようにして、自立共生的な生活スタイルを必然的に絶滅させる製品や制度を取り除くことである。皮肉なこ

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 道具の構造に焦点を合わせる
- 権力を掌握しているのは主要な道具の管理者
- (イリイチは自分の思想のイデオロギー化を避けようとしている?)

3 私は、道具を使う人々の性格の構造ではなく、道具の構造に焦点を合わせようと思う。私は新しい社会の条件として、新しい人間の創造を自明の前提としているのでもなければ、社会的性格と文化の両者がどのようにして変るかということを、知っているふりをするつもりもない。道具に限界を設定し公共福祉を自立共生的なものにする多元主義の立場は、必然的に生活スタイルの多様さを促さずにはおかぬだろう。

4 仮に私が政治的な戦略戦術をとり扱ったりすれば、私の議論は核心からそれてしまうだろう。おそらく毛体制下の中国を例外として、今日、自立共生的な方針にそって社会を再構築する能力をもつ政府は存在しない。権力を掌握しているのは国家、企業法人、政党、組織化された運動、専門的職業といったわれわれの主要な道具の管理者たちである。この権力は、彼らが操作する成長志向の諸構造を維持するために授けられたものである。

しかし、自立共生的な生産手段の採用は、それ自体では、ある特定の政治形態が他のものより適切だということを意味するものではないし、また、世界連邦制度をも、民族国家間の協定をも、コミュニケーションをも、もっとも伝統的な統治形態の多くをも排除するものではない。私は、社会の道具的再編成が達成されるための基本的・構造的基準を叙述するにとどめたい。

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 道具が破壊的になる時期をみわけ
- 公正という価値と道具に対する抑制
- 政治的限界設定からの経済学の模索

5 集合体としての道具が社会それ自体にとって破壊的になる時期を見わけのための方法論は、分配・参加両面での公正という価値を認識することを必要とする。私の簡潔な論述は道具に対する必要な抑制を明らかにするのに十分だと信じるが、その簡潔さはまた、私がこの論文で、どの程度手段を目的に従属させることがのぞましいかという結論を出すことをむずかしくするだろう。

6 脱産業主義的で自立共生的な社会に応用できる経済学は無視するわけにはいかないし、当然視しておいてよいものでもない。あらゆるタイプの産業的成長に政治的に定義された限界を受けいれる社会では、既成の用語の多くは再定義されねばならない。しかし、そのような社会でも不平等が除去できないのは確実である。

われわれの今日の制度的構造を逆倒するのに役立つ経済学は、政治的に定義された限界設定基準から出発する。私が注意を集めたいのは、技術的な用具に対するこうした否定的な設計基準である。

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 教育は錬金術
(失敗の繰り返し)
- 腐敗した権威が定義づけた価値を学校で身につける

産業主義的生産様式は「教育」と呼ばれる目に見えない新商品を製造することによって、はじめて十分に合理的根拠を与えられた。教育学は「偉大なる^{アルス・マゲナ*}技芸」の歴史で新しい一章を開いた。教育は、科学という魔術によってつくりだされた環境に適応する新しいタイプの人間を生み出す錬金術的過程の探求となった。しかし、各世代がどんなに多くの金額を学校に費やそうとも、大多数の人々はより高い段階の啓発にはふむきだと認定され、人工的環境で恵まれた生活を送る準備ができていないものとして見捨てられねばならないことが、つねに明らかとなった。

うことを知っている。いったん、人々の知識水準を定義したり計ったりする機関の権威を受けいれると、人々は彼らにかわって適切な健康と移動の水準を定義してくれるほかの機関の権威をも容易に受けいれるようになる。われわれの巨大制度の構造的な腐敗を見さだめるのは、彼らには困難なのだ。学校で身につけた「知識の蓄積」の価値を信じこむようになるのとおなじく、人々は、高速度が時間を節約してくれると信じ、所得水準がよい暮らしの意味をきめると信じるようになるし、そうでなければその代りに、より多くの製品の生産よりもむしろより多くのサービスの生産のほうが生活の質を高めると信じるようになる。

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 他者から操作されることの少ない道具
- 活動が創造的であることの喜び
- 制限を超えて成長した道具による、統制、依存、収奪、不能の増大
- 工場のような生産施設だけでなく、教育、健康、知識、意思決定を生み出す生産システムも「道具」

自立共生的な社会は、他者から操作されることの最も少ない道具によって、すべての成員に最大限に自立的な行動を許すように構想されるべきだ。人々は、おのれの活動が創造的である程度に依じて、たんなる娯楽とは正反対のよろこびを感得する。一方、道具が一定の点をこえて成長すると、統制・依存・収奪・不能が増大する。私は「道具」という言葉を、ドリル、ポット、注射器、箒、建築材料、モーターのような簡単なハードウェアだけを、また自動車や発電装置のような大きな機械だけを包含するのではない、広い意味で用いる。すなわち私は、コンフレックとか電流とか触知しうる商品を製造する工場のような生産施設と、「教育」とか「健康」とか「知識」とか「意志決定」とかを生み出す触知しえない商品の生産システムとを、道具のうちに含めるのである。私がこの言葉を用いる理由は、それを用いれば、人工品であれ規則であれ、コードであれ演算記号であれ、合理的に考案された工夫すべてを、ひとつのカテゴリに包摂することができるからであり、さらに、こういった計画され設計された手段すべてを、基本的な食料や器具のような、既存の文化のなかでは合理化する必要があると思われるではない他の物から区別することができるからである。学校のカリキュラムや婚姻法は、道路交通網に劣らず意図的に形成された社会的工夫なのである。

II. コンヴィヴィアルな再構成

- コンヴィヴィアルな道具とは、それを用いる各人に、おのれの想像力の結果として環境をゆたかなものにする最大の機会を与える道具のことである。

道具は社会関係にとって本質的である。個人は自分が積極的に使いこなしているか、あるいは受動的にそれに使われているかする道具を用いることで、行動している自分を社会と関係づける。彼が道具の主人となっていて、程度に応じて、彼は世界を自分で意味づけることができるし、また彼が自分の道具によって支配されている度合いに応じて、道具の形態が彼の自己イメージを決定するのである。自立共生的道具とは、それを用いる各人に、おのれの想像力の結果として環境をゆたかなものにする最大の機会を与える道具のことである。産業主義的な道具はそれを用いる人々に対してこういう可能性を拒み、道具の考案者たちに、彼ら以外の人々の目的や期待を決定することを許す。今日の大部分の道具は自立共生的な流儀で用いることはできない。

道具は、使い手によって選ばれた目的の達成のために、必要ならひんぱんにでもまれにでも、誰によっても容易に使われる度合いに応じて、自立共生的な道具は、ほかの人がそれを同等に用いることを妨げない。そういう道具は使用者がまえて認可をとることを必要としない。そういう道具が存在するからといって、それを使わねばならぬ義務が課されるわけではない。それは使用者に、彼の意図を行動のかたちで表現する

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 第二の分水嶺に向かいつつある制度はすべて、高度に操作的なものになりがちである。
(manipulative <-> convivial)
- 需要をつくりだす道具と、自己実現を助ける道具とのバランス

(以降頁、スターリニズムなど産業主義的社会主義の批判)

第二の分水嶺に向いしつつある制度はすべて、高度に操作的なものになりがちである。たとえば、授業を可能にするには、授業そのものより費用がかかる。役割にかかるコストは生産のコストをこえる。制度的な目的の達成に向けられた諸構成要素は、たがいに独立に用いることはできないようにますます設計しなおされる。車をもたないものは飛行機を利用することはできないし、飛行機の搭乗券をもたないものは国際協定に加入しているホテルを利用することはできない。

42

自立共生的な社会にとって基本的なことは、操作的な制度と中毒性のある商品およびサービスが、全く存在しないということではなくて、特定の需要(それをみたすために道具は特殊化するのだが)をつくりだすような道具と、自己実現を助ける補足的・援助的な道具とのあいだのバランスがとれていることなのである。最初にあげたような道具は、一般化された人間のために抽象的なプランにしたがって生産をおこない、あとであげたような道具は、それぞれ独自のやりかたで自分自身の目標を追求する人々の能力を高める。

44

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 脱学校化、脱病院化

適切な社会的配置がなされれば、たいていの人が、学校化されずとも、またグーテンベルク以前の書記の職業を再びつくりださずとも、読者として成長していくであろうのと同じように、十分な数の人々が医療の道具を使いこなせるように成長していくであろう。こうなれば治療はいつでもどこでも手に入るものになるので、こういった能力を独占に変えたり、商品としてこの能力を販売することに変えたりするのはむずかしくなる。非専門職化とは、天職の自由と、病人が資格をもった医師の擬似宗教的な権威から得ている時折の元気づけとを、改めて区別し直すことを意味する。

もちろん、たいていの普通の医療を非専門職化すれば、今日の詐欺師のかわりにいんちき医者が現れることもありうる。しかし、いんちき医者 of 脅威ということは、専門の医者がひき起す損害が増大するにつれてもっともらしさを失う。専門家によって発明されたり用いられたりする道具を社会化するのに、素人の自己修正的判断に代りうるものは存在しない。特定の治療

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 公正な社会とは一人の人間にとっての自由が、他人に取っての同等の自由が生み出す要請によってしか制限されることのない社会であるだろう。
- 学校教育は公正のために除去されねばならない

公正な社会とは、一人の人間にとっての自由が、他人にとっての同等の自由が生み出す要請によってしか制限されることのない社会であるだろう。そういう社会は前提条件として、まさにその特性によって、そういう自由を妨げるような道具を排除するという同意が必要である。このことは物的な機械としての道具だけではなく、学校制度のようなもともと純粹に社会的な配置であるような道具にもあてはまる。自立共生的な社会では、強制的で終りのない学校教育は、公正のために除去されねばならないだろう。生涯の特権を求めて終りなき階梯を昇りつめるといふ、特定年齢ごとの強制的な競争は、平等性を増大させることはできず、より早くスタートしたもの、より健康なもの、教室外でよりよく知識を装備されたものに有利に働くにちがいない。そういう競争は必然的に社会を、失敗者から成る多くの層に階層化する。それぞれの層には、より多く教育を消費したものは社会全体にとってより価値のある財宝であるので、より多くの特権を受けるにあたいると信じるように教育された脱落者が住むことになる。学校という手段による教育が、社会が機能を果たすために不可欠のように構築された社会は、公正な社会ではありえない。

II. コンヴィヴィアルな再構成

- 脅威は差し迫ったものである。
- 私たちの道具が社会全体を破壊するものとなるもうひとつの限度を認識せねばならない。

計画された産出物の増大と、内部不経済をそつと外部に転嫁する能力とによって評価されねばならぬものであるかぎり、制度的な逆倒を予見することはできない。経済学の用語と枠組は、他の点では対立的な経済的信条に共通する、抗しがたい価値の制度化というイデオロギーによってかたちづけられている。

脱産業主義社会の自立共生的な生活スタイルの理論的可能性を、新しい道具のための政治的プログラムに表現し直すためには、今日の道具の一般的な基本構造が人類の生存を脅やかしていることがいますぐ明らかにされねばならない。この脅威が差し迫ったものであり、効率を強制することの影響が、私たちの世代の大部分の人々に、益よりも害を与えていることが明らかにされねばならない。このためには私たちは、今日の諸制度が欲求不満をひきおこすものとなる限度を確認しなければならぬし、また、私たちの道具が社会全体を破壊するものとなるもうひとつの限度を認識せねばならない。

III. 多元的な均衡

- 限度のない生産が人類の生活を脅かしている。ここへ政治的議論を集中しなければならない。
- 生産の総算出が減少しないかぎり汚染防止対策は効果を発揮しない

限度のない生産が人類の生活を脅かしているいろいろな局面に、いまや政治的議論を集中しなければならない。健康・輸送・教育・住宅のシステム、いや政治や法のシステムさえうまく作動していない深い理由を覆い隠すだけの緩和策を処方することに熱心な人々によって、こういう政治的討論がまちがった方向に導かれることもありうる。たとえば環境危機という問題も、生産の総算出が減少しないかぎり汚染防止対策は効果を発揮しないことを指摘するのでなければ、上っ面だけのものになってしまう。そうするのでなければ、そういった対策は廃棄物を見えないところに移したり、未来に押しやったり、貧しい人々に押しつけたということになりがちなのである。大規模産業によって地域ごとに生みだされた汚染を全面的に除去しようとすれば、ほかのどこかでその数倍の被害を生みだしかねない装置や材料やエネルギーが必要になる。汚染防止対策を義務づければ、製品の単価があがるだけである。このことはみんなのために新鮮な空気をいくらかとおくことになるかもしれない。というのも、車を走らせたり、エアコンつきの家で眠ったり、週末に飛行機で釣場へ飛んだりできる人々が減るからである。しかしそうになると、自然環境の破壊のかわりに、いまよりいっそう社会を分解させることになる。石炭から原子力への転換は、今日のスモッグを、明日の高レベルの放射能で置き換えることである。精錬所を汚染規則がそれほど厳しくない海外へ移すことは、世界規模の高度汚染という犠牲を払って、ヴェネズエラ人ではなくアメリカ人を悪臭からまもることなのである。

III. 多元的な均衡

- 人々を脅かしている6つの側面
 - 過剰成長
 - 産業化
 - 人間を過剰にプログラミング
 - 政治参加の権利が生産力水準に脅かされている
 - 古いものの強制廃棄が伝統を活かす権利が脅かされている
 - 巧みに仕込まれた強制的な満足のおしつけによる公汎な欲求不満

産業主義的發展が第二の分水嶺を通過したあとで、世界のあらゆる人々を脅かしている六つの側面を確認しておこう。1) 過剰成長が、人間が進化してきた環境の基本的な物質的構造に対する人間の権利を脅かしている。2) 産業化が自立共生的な仕事をする権利を脅かしている。3) 人間を新しい環境にあわせて過剰に計画化^{プログラミング}することが、創造的な想像力を麻痺させてしまう。4) 生産力の新しい水準が政治参加の権利を脅かしている。5) 古いものを強制的に廃してしまふことが、言語や神話や道徳や審判における先例の源泉である伝統を生かす権利を脅かしている。私は以上五つの脅威を、手段を目的に倒置する破壊的な作用を共通してもっている、相互に関連はしているが区別可能なカテゴリーとして叙述するつもりである。6) 巧みに仕込まれてはいるが強制的な満足のおしつけが生みだした公汎な欲求不満は、六番めのより微妙な脅威を構成する。

III. 多元的な均衡

- 人々は限度内で暮らす事を学ばねばならない
- 禁欲を教え込もうというのは不可能

以降頁、中絶に関する議論など

人々は限度内で暮らすことを学ばねばならない。このことは教えてもらうわけにはいかない。生き残れるかどうかは、人々が自分たちには何ができないのかということを速やかに学ぶことにかかっている。人々は、無制限に繁殖したり消費したり使用したりするのを慎むことを学ばねばならない。人々を自発的に貧しさを選ぶように教育したり、人々が自制するように操作したりするのは不可能である。産出は増大させつつコストは低下する幻想を抱かせるように、全面的に構造づけられた世界にありながら、よろこびにみちた禁欲を教えこもうというのは不可能事に属する。

IV. 回復

省略

V. 政治における逆倒

- 背筋の凍るような黙示録的光景
- 強制される限界内での生存

きわめて近い将来のうちに、人間が道具の環境に対する干渉に限界を設定することができず、効果的な産児制限を実行できないなら、次の世代は多くのエコロジストによって予言された背筋の凍るような黙示録的光景を経験することだろう。こういう切迫した災厄に直面して、社会は官僚制的独裁によって設定され強制される限界内での生存という未来図をじっと待ちうけることもできる。あるいはまた、法的政治的な手続きを活用することによって、政治的過程に参与することもできる。過去についてイデオロギー的に歪んだ解釈がなされているために、政治的過程を正しく認識することはますます困難になっている。自由は強力な道具に対する権利、すなわち資本主義国家では個人や私的団体が社会主義社会では国家が、分別もなく無制限に要求する権利と解されるに至っている。再生は、西欧社会の基本構造が明確に認識されその回復が求められる場合にのみ、実現可能なのである。かつての政治的または文化的な植民地諸国が西欧的生産様式をふりすてる場合には、まったく異なった形式的構造を回復する似たような努力が必要になるだろう。

V. 政治における逆倒

- 悪の楽園（カコトピア）
 - 官僚的管理
 - 強制される限界内での生存
 - 管理的ファシズム

人間を官僚的に管理して生きのびさせようとするのは、倫理・政治両面の根拠からして受け入れることはできない。そうすることはまた、それに先行する大衆的な矯正療法セラピーの企てと同様不毛であるだろう。このことはもちろん、大多数の人々がはじめのうちは官僚的管理に従わないだろうという意味ではない。人々が人口増大と資源減少のふえいく証拠におびやかされて、自分たちの運命を独裁者たちの手に自発的にゆだねるというのは十分に考えられることだ。人々の面倒をみる技術官僚があらゆる次元での成長への限界設定を委任され、その諸限界を、これ以上の成長が完全な崩壊を意味する臨界点ぎりぎりに設定することだって考えられる。こういう悪の楽園カコトピアはたえうる限度での産出の最高水準に、産業主義時代を維持することもできるのである。

そうなれば人間は、自分を保護して生きのびさせ、しかも生きのびることをますます無価値にするような、プラスチックのドームの中で生きることになるだろう。

人々は誕生から死にいたるまで世界規模の校舎に閉じこめられ、世界規模の病院で処置を受け、テレビジョン・スクリーンにとり囲まれることになり、そういう人工的な環境が世界規模の牢獄と区別されるのは名前だけということになるだろう。

V. 政治における逆倒

- 破壊的な消費者が多数派
(崩壊を待つしか無い)
- 成長は停止する
- 人々はほとんど一夜のうちに、主要な諸制度に対してのみならず、自称危機管理者の奇蹟の処方箋に対して信頼を失うだろう。

争点がまだ生れていないのに、それに反対する多数派などというものが存在するはずがない。成長に限界を設定することに賛成の多数派というのは、いかなる代償を払おうとも成長を要求する多数派と同様、滑稽な概念である。

2 崩壊から混沌へ

どのようにして産業主義社会の崩壊が究極的に重大な争点となるか、私はただ推測するほかはない。しかし、きたるべき危機の範囲内での指針を提出する資格についてなら、かなり強い申立てをすることができるはずだ。私は成長は停止すると思う。生産に対する産業主義的独占の全面的倒壊は、その拡大を支えていた多様なシステムの破産の相乗作用の結果であるだろう。こういう拡大を維持しているのは、細心なシステム工学によって安定的調和的に現在の成長を持続できるという幻想である。ところが実際は、そのシステム工学があらゆる制度を同時に第二の分水嶺に向けて押しやっているのだ。人々はほとんど一夜のうちに、主要な諸制度に対してのみならず、自称危機管理者の奇蹟の処方箋に対して信頼を失うだろう。教育・健康・福祉・交通・ニュースといった価値を定義する現行制度の能力は突然に失われるだろう。というのはいつかはそれが幻想であることが認識されるであろうから。

V. 政治における逆倒

- どれかひとつの崩壊と取り組むことはまだ可能だ
- 結果はパイを大きくし、それが空中楼阁であることを忘れるようと懸命になる
- 倒壊にともなう騒音に目がくらんで、倒壊そのものを適切な見地からとらえそこなうということもありそうなことだ。

それぞれのシステムを別個に切り離した見地から、われわれの様々なシステムのどれかひとつの崩壊と取り組むことは、いまはまだ可能だ。有効な対策があるとも思えないが、それでもなお、提案されたあらゆる対策を支持するための手立ては見つかるものだ。

提案される対策のどれも誰かの気には入るのだから、ふつうの解決策は両方とも試みることになる。結果は、パイを大きくし、そのパイが空中楼阁であることを忘れようと、いっそう懸命になることではない。

たんに産業主義社会内に生じた最初の危機というのではなく、産業主義社会そのものの最初の危機の触媒として、ウォール街の暴落の役割を果すのが、どういう一連の出来ごとであるのか予言するのは、たんなるお占いでしかないだろう。といって近い将来に、道具の成長を頓挫させるような影響をもつ出来ごとが生じないときめこむのは、おろかなことである。そういうことが起ったとき、倒壊にともなう騒音に目がくらんで、倒壊そのものを適切な見地からとらえそこなうというのもありそうなことだ。

V. 政治における逆倒

3 危機の洞察

生産に限界を課そうとする諸力は社会の内部ですでに作用している。公開された、^{カウンタ}管理に^{フォイル・リサーチ}対抗する研究は、こういった個人が、破壊的とみなされる成長を告発するにあたって、いっそうかたく結びつき、いっそう自覚を深めるうえで大いに役立つにちがいない。彼らの声は過剰生産社会の危機が尖鋭化するにつれて、新たな反響を得るものと予想してよい。

これ以上の成長は、多次元的な大破局に行きつくにちがいない。破局に至ることなく人々が成長に対する多元的な制限を受け入れるなど、とでもありそうもないことにみえる。避けがたい破局的出来ごととは、文明の一危機であるかそれとも文明の終末であるかのどちらかである。つまり人類絶滅による終末か、T・E・フレイジアのような人物によって管理される、B・F・スキナー流の世界規模の集中収容所という形の終末のどちらかである。このように予知可能であっても、破局は、それが起った瞬間に必須の社会的要求がはっきりと表現されるのでなければ、ほんとうの危機、いい換えれば選択の機会となることはできない。そういう要求は、今日の産業主義的幻想の崩壊こそ効果的で自立共生的な生産様式を選択するための必要条件であることを論証できる人々によって提示されねばならない。そういう諸グループを用意することこそ、現時点での新しい政治の中心課題なのである。

- Counter Foil Research
- これ以上の成長は、多次元的な大破局に行きつくに違いない。
- 破局はそれが起こった瞬間に必須の社会的要求がはっきりと表現されるのでなければ、本当の危機、言い換えれば選択の機会となることはできない。
- そういう要求は、今日の産業主義的幻想の崩壊こそ効果的で自立共生的な生産方式を選びとるための必要条件であることを論証できる人々によって提示されねばならない。そういう諸グループを用意することこそ、現時点での新しい政治の中心課題なのである。

V. 政治における逆倒

災厄の避けがたい暴威を、自立共生的な再構築へと革命的に転回させるいとなみに、大多数の人々を協同させることができるものは、弱きものとしての言葉あるのみなのだ。

論点

- * コンヴィヴィアリティとは <-> 操作的とは
- * コンヴィヴィアルな道具とは
- * ヴァナキュラーな活動(シャドウワーク)とは

インターネットの場合

- * かつてはコンヴィヴィアルでヴァナキュラーだった
- * インターネッティングはコンヴィヴィアルには成立しなくなっている
- * 今日も運用者は大部分がマニピュラティブであって、そのでたらめな部分をヴァナキュラーな古株が支えている
- * アプリケーション層はコンヴィヴィアルか？
- * コンヴィヴィアルじゃなくても、管理され安心して使えるもののほうがいいのか？ 安心って？
- * 大部分のインターネットユーザはパソコンよりケータイや iPad のほうがいいのか？ そこから次の世代を担う若者は生まれてくるか？